

第 1 0 4 号

研究所報

三 好 教 育 研 究 所

令和 5 （ 2 0 2 3 ） 年 度

ごあいさつ

『研究所報第104号』の発刊にあたり、ごあいさつを申し上げます。

三好教育研究所では、「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動」を研究主題に、三好郡市内各園各校のご協力をいただきながら、研究・研修活動を行ってまいりました。

今年度の研究発表会では、馬路小学校から「小規模校の特性を生かした教育活動の推進～他校とのオンライン学習の実践を通して～」、井川中学校から「変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～」を研究テーマにしたすばらしい研究実践をご報告いただきました。その後の講演会では、全国に広がる教員の学びの場「菊池道場」を主宰している教育実践研究家の菊池省三先生を講師にお招きして、「『ほめ言葉のシャワー』が成立する教室をつくろう」と題したご講演を拝聴し研修を深めました。現代の学校現場に即した独自のコミュニケーション力あふれる実践事例の紹介は、今後の各園各校での取組に大いに参考になるものでした。今回は4年ぶりに対面での研究発表会を実施しました。コロナ禍で一堂に会することができておりませんでしたので、あえて対面の形をとらせていただきました。研究発表や講演を生で聴く臨場感と、久々に三好郡市内の教職員同士が顔を合わせるという良さを感じていただけたのではないのでしょうか。研究発表会開催にあたりご協力いただいた三好教育会役員や研究発表会協力委員のみなさん、大変お世話になりました。

さて、本研究所では、今年度も研究員による研究はもちろん、各種調査、小教研情報部会およびへき地複式部会との連携による研究推進、中堅教員・管理職に対する学校運営研修、徳公教組とタイアップした若手教員の採用研修などに取り組んでまいりました。また、従来からの教育機器の貸し出しやミライムの設定、DVDダビング、拡大印刷等のお世話に加え、今年度から現場の業務軽減のお手伝いとして、各校行事予定の一括取りまとめのお世話もさせていただきました。微力ではありますが、三好郡市内各園各校の教育活動や次代の三好教育を担う教職員の人材育成に寄与できたものと考えております。

今年度の『研究所報』には6名の先生方から研究主題に沿った研究実践についてのご報告をいただきました。おまとめいただいた貴重な研究成果は、各園各校の先生方の今後の教育実践に役立つ内容になっております。ぜひご覧いただき、参考にいただければ幸いです。ご執筆いただいた先生方、本当にありがとうございました。

新型コロナウイルスが5類感染症に位置づけられたにもかかわらず、感染拡大は第10波にまで及び、加えてインフルエンザも同時流行するなど、今年度もまた余談を許さない状況に見舞われた1年となりました。このような状況の中で日々奮闘しておられる現場の先生方に敬意を表します。三好教育研究所も三好郡市内の先生方と共に手を携え、その一助を担えるように鋭意努力してまいります。今後とも変わらぬご指導ご協力をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

令和6年3月

三好教育研究所 所長 高岡 和恵

目 次

あいさつ

三好教育研究所 所長 高岡 和恵

—— 委嘱研究員研究 ——

- 未来へつなぐ幼児教育の創造 1
人と関わる力を育み，互いに認め合う仲間づくりをめざして
～友達との関わりを通して～
池田幼稚園 教諭 森本 智恵
- 特別支援学級における「やってみたい」「できた」と思える授業づくり 5
～繰り返し学習することで自信につなげ自己肯定感を高めるための実践～
加茂小学校 教諭 川人 律子
- 互いに認め高め合う学級経営を目指して 8
芝生小学校 教諭 西原 依里
- 学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS） 11
～「き・め・つ」を学校全体に浸透させよう～
白地小学校 教諭 竹原 朋子
- 豊かな人権感覚を身に付け，自ら考え，行動できる児童の育成を目指して 14
～人権教育を柱として取り組んだ実践～
山城小学校 教諭 川人 美保
- ふるさとに誇りをもち，主体的に生きる力の育成 17
～ふるさと学習や小規模の強みを生かした取り組みを通して～
西祖谷中学校 教諭 内田 ゆかり
- 令和5年度 教育研修・研究事業報告 20
- 歴代委嘱研究員一覧（平成元年～） 22

未来へつなぐ幼児教育の創造
人と関わる力を育み、互いに認め合う仲間づくりをめざして
～友達との関わりを通して～

池田幼稚園 教諭 森本 智恵

1 はじめに

本園は、年少4歳児、年長5歳児の2学級、2年保育である。4歳児は、半数が初めての集団生活であり、入園当初は新しい環境や保護者と離れることに不安を感じて泣いている幼児もいた。また、周りの幼児の遊びに興味をもち、「入れて」と自分から声を掛けて友達と積極的に関わろうとする幼児がいる一方で、友達の遊んでいる様子を近くで見ても関わり方が分からず、遊びの輪に入ることができない幼児もいる。

そこで、友達と関わって遊ぶ楽しさを感じ、自分から関わったり思いを伝えたりしてほしいと思い、この主題を設定した。

友達と関わる中で、自分らしさを発揮しながら、相手の思いに気付いたり、思いやりをもって行動したりする姿を大切に、互いに認め合う仲間づくりをめざしていきたい。そのためには、幼児の発達特性を踏まえながら、教師が一人一人の幼児をどのように理解し、環境を整え、援助していけばよいのかを研究を通して考えていきたい。

2 研究の方法と実践

(1) 園および幼児の実態

- 年少4歳児8名、年長5歳児18名、計26名の2学級、2年保育である。
- ほとんどの幼児が預かり保育を利用しており、幼稚園で過ごす時間が長い。
- 4歳児8名は、落ち着いて生活しており、それぞれが好きな遊びを見つけ、穏やかに過ごしている。半数の園児が家庭からの入園のため、集団生活の中で自分の思いを言葉にすることが苦手で、困ったことがあっても黙り込んでしまう幼児もいる。

(2) 研究の視点

- 友達の思いや考えに気づき、共に活動する楽しさを味わうための環境構成や援助の方法を探る。
- 一人一人の表情や言動から幼児の内面を理解し、人と関わる力を育むための支援の在り方を考える。

3 実践事例

事例1 「ポケモンのご飯作り」6月上旬

数日前からジャングルジムでポケモンの鳴き声や動きを真似るなどして、数人の幼児が一緒に遊んでいる。この日はジャングルジムの周りに4歳児全員が集まり、それぞれの好きな遊びを楽しんでいた。すると、A児とB児が「ポケモンごっこしよう」と誘い合い、ごっこ遊びを始める。

ポケモンごっこをしていると、A児が「私、ポケモンのご飯作る。」と言い、B児も「私もす
--

る。」と2人で、砂をご飯に見立てて料理作りを始める。それを見た保育者が、アジサイの葉やシロツメクサの茎をごちそうに見立て、「こんなお皿はどうですか？そうめんもありますよ。」と遊びに参加する。「それいいな。」とA児とB児が保育者のしている様子を真似て料理を並べていると、「私もそれ使いたい。どこにあるん？」と興味を示したC児、D児がやってくる。保育者が葉っぱに草や花を巻いている様子を見て、2人も「これを入れてみよう。」と周りのいろいろな草花を摘んできて料理作りを始める。

遊びに参加する幼児が増えてきたため、保育者がベンチを持って来て場所を広げると、その様子に気付いた周りの幼児たちが「何してるの？」と集まり、「入れて。」「いいよ。」と言葉を交わしながらみんなで料理作りが始まった。

人数が増えて料理も多くなり、道具が足りなくなってきたことに気付いたB児は、「フライパンとお皿がもっといるな。」と言う。すると、その言葉を聞いたC児が「お皿の葉っぱ、先生と取ってくるわ。」と言い、保育者を誘ってアジサイの葉を取りに行った。周りの幼児たちも、「春巻きに塩かけるよ。」「いいよ。」「これどこに置いたらいい？」「ここに並べてください。」「私はそうめん取ってくるな。」「分かった。」などと、友達同士で次々と言葉を交わしながら料理作りを楽しんでいる。その後も、ポケモンになる幼児や料理を作る幼児など、それぞれの役割に分かれてごっこ遊びが続いた。



(省察)

- この日は、A児とB児が「ポケモンのご飯作り」という、新しい遊びをし始めた。砂をご飯に見立てて遊んでいる姿に、保育者はこの季節ならではの自然物を取り入れて遊んでほしいと思い、草花を摘んで料理作りに参加した。すると、すぐそばにいた他の幼児も興味をもち、遊びに参加するようになっていった。周りの幼児は、友達と保育者が一緒に遊びを楽しんでいる姿を見て、「何をしているのだろう」「おもしろそう」と興味を示したのだと思う。
- 数人が遊びに加わったことで、保育者は、クラス全体での遊びにつながってほしいという思いをもち、遊びの場を広げた。すると、いつもは友達の遊んでいる様子を見ていても自分から声を掛けることのない幼児たちも、「入れて。」と言葉を交わし、遊びの仲間入りをした。その様子から、保育者が幼児の動きや場の変化を読み取って環境構成をしたり、遊びに加わったりすることで、幼児が「やってみたい」と興味をもち、遊びに加わるきっかけになったのではないかと感じた。
- 友達同士のやり取りや友達と保育者の会話から刺激を受け、次々と言葉があふれてつながり、言葉のやり取りを楽しみながら遊びを進めることができた。料理作りがクラス全体の遊びになったことで、幼児はみんなと遊ぶことの楽しさや、一体感を得ることができたと思う。

事例2 「全部使いたい」6月中旬

E児が空き容器を箱に並べて持ち歩きながら、友達や保育者に「ジュースいりますか？」と声を掛け、ジュース屋さんになって遊んでいる。その様子を見ていたF児も同じ空き容器を持って来てE児と同じように箱に並べ、歩きながらジュース屋さんを始める。

E児が自分で作ったジュースを机に置いて道具を取りに行っている間に、F児がE児の置いた箱からジュースを取って自分の箱に入れる。戻って来ると、自分のジュースが全部無くなって

いることに気付いた E 児が、「僕それ使ってたんだけど…」とつぶやくように F 児に伝えるが、聞こえていないのか返事がない。ジュースに使っていた空き容器は全て使い切っていたため、「F さん、それ E さんのジュースだって。E さんに返してあげる？」と保育者が尋ねるが、F 児は首を横に振って返そうとしない。保育者が「F さん使いたかったんだね。」と伝えると F 児は頷く。「でも F さんと同じように、E さんもそのジュース使いたいみたいだよ。どうしようか？」ともう一度問い掛けると、F 児は「全部使いたい。」と泣き始め、納得できないようである。

そこで保育者が、近くにいた年長組の G 児に、「G さん、F さんがこのジュース全部使いたいみたいだけど、E さんも使いたいんだって。どうしたらいいかな？」と尋ねてみた。すると「時計が 9 になったら貸してあげるとか、時間を決めてしたらいいんじゃない？」と答える。保育者が「年長さんが教えてくれたけどどうする？」と聞くと、G 児の話を聞いているうちに泣き止



んでいた F 児は「そうする。」と納得したような表情で頷いた。

F 児が保育者と一緒に「9 になったら貸して。」と E 児に伝えに行くと、E 児も「いいよ。」とその提案を受け入れ、F 児は E 児に容器を渡す。

時計の針が 9 になり、E 児が約束通り「F さんどうぞ。」と容器を渡しに来ると、F 児は「ありがとう。」と、嬉しそうにジュース屋さんを始めた。

(省察)

- F 児は、いつも友達に優しく、これまで大きないざこざになるようなことはなかった。しかし、初めての集団生活であるため、物の貸し借りをしながら遊ぶという経験は少なかったのではないかと思う。そのため、「使いたいのにどうして使えないのか」ということが分からず泣いてしまったのだろう。保育者は、今まで「これが使いたい」という強い自己主張をしなかった F 児が、自分でやりたい遊びを見つけ、それを主張できるようになってきたことを受け止めながらも、F 児の使っているジュースは E 児が先に使っていたもので、勝手に取るのはよくないことだということを分かってほしいと思い、声を掛けた。
- なかなか気持ちが落ち着かない F 児の姿から、保育者は、日ごろから関わっている年長児ならよい提案をしてくれるかもしれないと思い、近くにいた G 児に尋ねてみた。G 児の話を聞いているうちに F 児の気持ちが落ち着いたことや、「時間を決めて貸し借りをする」という G 児の提案が、時計を見ることが得意な E 児と F 児にぴったりの方法であったことから、F 児も納得し、E 児も約束の時間になるとジュースを渡すことができたのだと思う。
- 保育者は、お互いに相手にも使いたいという思いがあることに気付いてほしいと思い、「どうしようか？」と答えを 2 人に委ねた。しかし、今の 4 歳児にとって、自分の気持ちを抑えながら物の貸し借りをしたり、自分たちで解決方法を考えたりするのは難しいことであった。一人一人の年齢や発達に応じて、具体的な方法を提案したり幼児たちで考えられるように促したりするなど、援助の方法を工夫することの大切さを感じた。

事例 3 「おばけやしき」10 月下旬

5 歳児が大型積み木などを使ってリズム室に作ったおばけやしきに招待してくれた。通るたびにおばけ役が声や音を出しながら驚かせてくれることを楽しみ、4 歳児たちは何度も入って遊んでいる。また、5 歳児とおばけ役を交代して驚かせる側も経験する。

おばけやしき遊びが終わって保育室に戻ると、「楽しかった。」「Hくんのおばけびっくりしたな。」「また明日もしたい。」と話している。すると、A児が、「今日は年長さんと一緒に給食を食べたいな。」と言う。それを聞いた他の幼児も、「それいいな。」「一緒に食べたい。」と言う。

そこで、5歳児に「給食と一緒に食べませんか？」と聞きに行くと、5歳児も「いいよ。」と賛成してくれた。給食を持って行くと、5歳児に「ここ空いとるよ。」「一緒に食べよう。」と誘ってもらい、嬉しそうに座る。

食事中には、「Yくんの給食いっぱい入っとる。」「年長さん食べるの早いな。」とたくさん食べる5歳児の姿に驚いたり、「僕もこれ食べられる。」「もうすぐ終わるよ。」と苦手な野菜を食べることに挑戦したり、いつもより早く食べ終わったりする。

(省察)

- 5歳児が準備してくれたおばけやしきに招待してもらい、遊びに参加したことで、「年長さんってこんなにおもしろいことができるんだ」と憧れをもったのではないかと思う。また、お客さんだけでなくおばけ役も経験できたことが、5歳児がどのように驚かせていたかを思い出しながら、自分なりの表現をする機会になった。
- A児の「年長児と一緒に給食を食べたい」という気持ちを大切にしたいと思い、5歳児担任や他の職員に相談し、みんなで給食を食べられるように、5歳児のランチルームの机の配置を変えた。一緒に給食を食べる機会をもてたことが、5歳児により親しみをもつ経験になった。また、5歳児が自分たちよりも量の多い給食を食べている姿を見て刺激を受け、自分ももっと食べられる、苦手なものも頑張ってみよう、という気持ちが芽生えたのではないかと思う。
- 次の日もおばけやしき遊びは続いたが、行事でリズム室を使うため片付けなければならなかったもので、十分に遊びを続けられる時間や場の確保が必要であったと反省した。年長児と遊んだ経験から刺激を受けて、保育室でも自分たちでおばけや段ボールの囲いを作って遊びを続けていた。今後は、異年齢の友達と関わるのが楽しいと感じて様々な遊びに取り組めるように、時間や場を確保するなど環境構成を行っていきたい。

4 おわりに

幼児は、幼稚園で友達や教師と共に過ごす中で、みんなと一緒に遊ぶ楽しさを感じ、もっと一緒に遊びたいと思ってさらに関わるようになる。その中で、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いて折り合いをつけたりしながら、友達同士の関わりを深め、相手を大切に思う気持ちをもつようになる。

今回の研究を通して、教師は幼児が自分の思いを伝えながら遊んでいる姿を受け止め、寄り添い見守る中で、育ってほしい姿を思い描きながら、意図をもって環境構成を行ったり、幼児同士がつながるような言葉掛けをしたりするなどの援助を行うことが必要だと感じた。

幼児自身が周りの友達に関心をもって言葉のやり取りを楽しんだり、クラスで話し合い、みんなで考えを出し合ったりすることの大切さやつながりを感じられるように、幼児の表情や言動から心の動きを捉え、一人一人の発達や特性に応じた援助をしていきたい。今後は、幼児にとってより多くの経験を重ねられるように、地域や関係機関との交流など、多くの人と関わる機会をつくっていききたい。

これからも、日々の保育を振り返り、改善を図りながら幼児の内面を理解し、幼児が周りの人と関わる力を育むための支援の在り方を考え、日々の保育の充実を図っていききたいと思う。

研究主題

特別支援学級における「やってみたい」「できた」と思える授業づくり
～繰り返し学習することで自信につなげ自己肯定感を高めるための実践～

加茂小学校 教諭 川人 律子

1 はじめに

本校は、全校児童 197 名、どの学年も 1 学級で 30 人以上のクラス編成である。特別支援学級には自閉症・情緒 1 学級、知的 2 学級、20 名の児童が在籍し、通級指導教室も設置されている。本校は、チーム加茂小として教職員間の絆が強い。児童の状況を把握・共有するために、学年に分かれて月に一回、教職員間の情報交換（校内支援委員会プチ）を開催している。また、学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）を推奨する「かもっこスマイルプロジェクト」にも取り組んでいる。教育活動全体を通じて行動支援に対する目標を明確にしている。本研究は SWPBS の考え方を基に取り組んだものである。

2 研究の目的

担任する知的支援学級は、7 名の児童が在籍している。4、5、6 年と他学年にわたり在籍しており実態も大きく異なるため、教育課程や時間割については特別支援学校に基づいた編成を行う必要がある。また、手先が不器用で集中力が持続しない子どもたちが「やってみたい」「できた」と思える学習にしたいと考えた。そこで、繰り返し学習し成功体験を積み重ねることで、自信につなげ自己肯定感を高め、自ら行動できる子どもを育成することを研究のねらいとした。

3 研究の概要

（1）特別の教育課程の編成 ～生活単元学習・自立活動～

本学級は、各教科（国語、算数、理科、社会など）の代わりに特別の教育課程である生活単元学習や自立活動を取り入れる。

（2）スケジュールボードや ICT 活用の工夫

本学級の児童は、言葉で聞いただけでは何をして良いかわからず行動を起こしにくい。スケジュールボードや ICT を活用し、イラストや写真等の視覚的な支援を行うことで自発的な行動を促せるようにしたい。

4 研究の実践

（1）生活単元学習 ～3つの活動～

「やってみたい」「できた」と思える授業づくりを実践するため、児童の思いや保護者の願いを取り入れた生活単元学習を構想することとした。その際、個別の教育支援計画やアセスメント（SM 社会生活能力検査）を活用した。

保護者の「手先の器用さを身につけて欲しい」という願いや児童の「ゲームをするのが好き」「調理するのは楽しい」という思いは、単元構想を支える基盤となるものである。そ

内容	目標
ゲーム	・順番を守って遊ぶことができる。
調理	・計量カップを使うことができる。 ・缶詰やパウチ袋を手で開けることができる。 ・果物ナイフを使うことができる。
作業	・穴開けパンチを使うことができる。 ・ひも通し、本結び、ちょう結びができる。

の上でアセスメントにおいてつまずきが見られた項目「ひもを結んだりほどいたりできる」や防災教育の観点である手先を使う内容「缶詰やパウチ袋を手で開ける」に着目し、3つの活動を年間計画に位置づけ実践に取り組んだ。

生活単元学習の年間計画

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ゲーム（アルファベットパズル・カードとり・魚釣り・ボウリング・パラシュート）										
調理（デザート・餃子の皮のピザ・ホットサンド）										
作業（ストローを分けて数える・プリントをひもでつづる）										

①ゲーム活動

ALT と一緒に簡単な英語遊びをしている。スケジュールボード（以下「ボード」と表記する）

①の空欄のところにはボード②の3つのゲームカードの1つを、その日の日直が選んで決めることができるようにした。「自分で選ぶ」「決める」ことで自発的で主体的な学びにつながる。喃語でしか発することができない児童もイラスト入りのカードを見て手で操作して「これがしたい」と決め、自分が選んだゲームをみんなと



ボード①



ボード②

一緒に楽しんだ。「自分が決めたことが認められる」ことで自己肯定感が高まった。ALT との交流を初めは恥ずかしがっていたが「ロック、ペーパー、シザーズ、ワンツースリー」とじゃんけんでは順番を決めること、「待つ」「行動する」「次の人に渡す」など集団行動の規律を守ることができるようになった。

②調理活動

「手洗い、マスク、消毒」と感染予防に必要な項目を挨拶前に徹底した。その行動ができると授業を始めることができる。このスケジュールは作業学習にも取り入れている。ボード③は全体スケジュールでボード④はデザートの作り方である。次に何をしたらいいか困った時の手順として視覚的に提示している。今では、ボード④を見なくても



ボード③



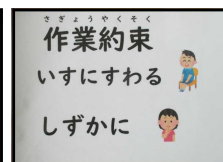
ボード④

自分たちで取り組めるようになっていく。自分でできることが自信につながり、自己肯定感が高まっている。

③作業（道徳）活動

クラスのために、給食の牛乳ストローを分けたり、数えたりする作業を行っている。作業は、清潔かつ丁寧にを行うことを大切にしており、仲間の信頼を得ている。これは、支援

学校での中学部や高等部の相手を意識した作業学習につながる。「ストローを給食の準備の時に分けるのは時間がかかる。助かる」「ありがとう」の言葉を友達や交流学級担任からかけてもらえる。みんなの役に立つことで自分たちもクラスの仲間の一員であると認識できる。ボード⑤はボード③でも使ったスケジュール「手洗い、マスク、消毒」を使うことで感染予防について繰り返し学習することができる。作業約束（カード①）を確認し、守ることができれば記録ファイルにシールをもらうことができる。シールをもらうことで「できた」という達成感を味わえた。

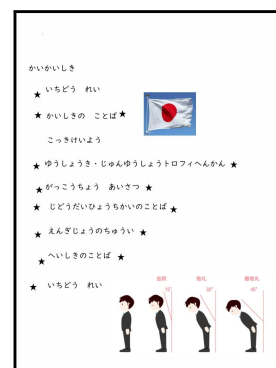
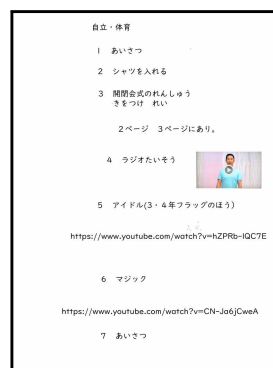


カード①

ボード⑤

(2) 自立活動 ～ ICT 活用～

自立活動は、「挨拶をする」「手順書を見てトイレ掃除をする」「式典で礼ができる」などを目標とした。右は、タブレット内の「MetaMoJi Classroom」の画面である。運動会練習では、ラジオ体操やダンス動画の URL を貼り付け、素早く手軽に見えるようにした。これなら自分だけで操作して画面を出すことができ、持って帰って家で見ながら練習できる。繰り返し練習し努力を続けたので、運動会の練習や本番では笑顔で活躍する姿を見ることができた。



5 結果と考察

生活単元学習の3つの活動を通して子どもの中に満足感や達成感が得られると、「またやりたい」「自分（一人）でやりたい」という意欲がわき、自主的に活動する姿が見られるようになった。スケジュールボードによる視覚的な支援や繰り返し行う活動によって見通しがもてるようになったことは、落ち着いて学習することにもつながった。また、自立活動においても繰り返し学習することが自信となり運動会やマラソン大会、発表会の行事にも「やればできる」と笑顔で参加することができた。

しかし、「おはよう」「さようなら」などの挨拶をする時、挨拶設定場面ではできていても急に声をかけられると戸惑い返事ができないこともあった。このような学習をしたことを日常生活に般化することが課題としてある。

6 おわりに

特別支援学校から交流として小学校に勤務して3年目となった。小学校と支援学校をつなぐ役目を果たすことが私の使命であると感じて日々教育活動を行っている。練習や努力は必ず実を結ぶ。子どもたちが自信に満ちた表情で共に学び共に生きる学級経営を目指してこれからも子どもたちと一緒に挑戦し学び続けていきたい。

(参考文献)

文部科学省 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/mext_00803.html

徳島県立総合教育センター <https://www.tokushima-ec.ed.jp/tokusou/tokubetsushien/siryo>

互いに認め高め合う学級経営を目指して

芝生小学校 教諭 西原 依里

1 はじめに

本校は全児童114名で、素直で明るい子が多い。幅広いことに興味をもち、何事にも楽しみながら活動している様子が見られる。

しかし、一人一人の児童に目を向けると、自分中心の行動をとってしまったり、興味や意欲がなくなり思わぬところで挫折し、投げ出してしまったりしている様子が見られる。

本校の学校教育目標は「知・徳・体の調和のとれた輝く子どもの育成」である。そして、めざす児童像は、「やさしく（思いやりのある子）、かしこく（進んで学び合う子）、たくましく（健康でねばり強く努力する子）」とし、全教職員で児童の指導にあたっている。

2 研究の目的

本学級の児童は、明るく活発な27名である。しかし、やる気をもっても継続的にできなかったり、自分の役割を見失い、自信なく過ごしていたりする児童も見られた。そこで、学級経営の方法について研究し、一人一人が認め高め合える学級にしていきたいと考えた。また、校内で取り組んでいるSWPBSのクラスへの取り入れ方についても工夫する方法を知っていきたいと考え、本研究に取り組むことにした。

研究を進めるにあたり、人権教育の研修で学んだ、発展を目指した3つの視点「知ること、気づくことの大切さを学ぶ」「自分ごととして考え、話し合い、つながる」「人を人として大切にすること」を方策の中心として考え、進めていく。

3 実践

(1) 教室での取り組み

① ミニ先生

授業後半、練習問題やワークなどが早く終わった児童は、問題がまだ解けておらず、悩んでいる友達に教える「ミニ先生」になれるようにした。

（さらに問題を解きたいという意欲のある児童や、時間を持て余している児童等に対しては、練習問題を解くという選択肢も用意しておく。）友達に意識を向けて進み具合を確かめたり、教える中で自分の身についている力を試したりする時間になっているようであった。

さっきまでわからずに悩んでいた児童も、できた瞬間「自分も教えよう。」と自信がついた顔立ちで困っている友達の元へ歩み寄る姿が見られた。学習中に教え合う活動を続けることで、生活の中でも「何かしようか?」「だいじょうぶ?」といった声かけや、係の仕事でも「手伝うわ。」と言って、自然に仕事を手伝う児童も増えた。手伝ってもらう方も素直に頼むことや、必要か判断して正しく断るということもできるようになった。



② 読み聞かせ，新聞タイム

本校では低学年は週に一度，中・高学年は月に一度ボランティアの方による読み聞かせがある。本学級では，それに加えて学習の終わりなどに時間を取って読み聞かせをしたり，週に一度朝の活動の時間に新聞を読んだりするようにした。また，理科や社会科の学習内容に合った本を用意し，一部分を読んだり，紹介したりした。

児童は，興味をもって聞いたり，紹介後に「読んだことない」と言いながら本に触れたりしていた。普段の休み時間は，遊びの中での交流が多いが，同じ本に興味をもった児童同士の中で共通の話題ができ，新たなつながりをもつ様子が見られた。実際に見て知っていることで会話したり，インターネットでさらに調べてみたりする児童もあり，学習を深める様子も見られた。

③ お楽しみ係

学期の初めに，係当番と一緒に「お楽しみ係」を決めた。係活動を通して児童自身の充実度が上がったり，より良い仲間同士で楽しむことで関係を築けたりすることや，高学年に向けて企画・実行する経験が少しずつできればよいと思い，設定した。毎学期，児童の提案する係を並べ，児童がやりたいと思う係に携われるようにした。「お楽しみ係の決まり」として，“学級のみんなを楽しませる内容にすること”“活動は計画的に準備して月に1・2回程度行うこと”“協力して行うこと”“友達をけがさせない・傷つけないルールを設定すること”を話し，取り組んだ。

実際に行ってみて，段取りやルールの甘さなど，失敗はたくさんあった。しかし，それまでにできる準備は何かを自分たちで考え，みんなに活動内容を周知し，実行する，ということを繰り返し行っていると，友達と「次はこうしよう」と相談し，次の計画を立てていく，という流れができていた。

また，計画を何度も立てていると，児童の提案する内容によい変化が出てきた。例えば，ゲーム係の初めは「ドッジボールをしよう。」くらいの内容であったが，「ドッジボールとだるまさんがころんだを合わせて，鬼が振り向いた瞬間は止まらなければいけないことにしよう。」「ボールを2個にしよう。」「やわらかいボールならケガしないかもしれない。」など，面白そうだから挑戦してみようという考えを，ゲームとして楽しめる工夫を加えた内容に膨らませることができていた。

他の，劇係，クイズ係，掲示係…といったそれぞれの係でも，考えたことを試し実行している内容には，教師も予想していないものがたくさん提案され，みんなで楽しめる時間がいくつもできた。

〈劇係〉



〈スポーツ・ゲーム係〉



〈クイズ係〉



(2) SWPBS（学校全体で取り組むポジティブな行動支援）

① ステップアップ目標の掲示

本校の取り組みで、「芝生っ子 きらきら プロジェクト S」という SWPBS を行っている。学級でも、きらきらプロジェクトに即した内容と児童が取り組みたい内容を含めて行った。学期の初めに、学活の時間を使って児童で話し合いを行い、「できるようになりたいこと」や「みんなで守っていききたいこと」をいくつか（6 程度）決め、短冊にして見えるところにつるした。「教室に入る時には挨拶をする（教室入口に名簿を貼り、できたら○）」や「水筒のひもをまく」「ロッカーを整頓する」など、取り組みを全員で達成出来たら短冊に○をつけていった。意識を高めるためにも、○→◎→花丸といったように 3 回で花丸がもらえるようにした。丸がつくたびに拍手が起こり、さらに増やせるように行動しようという意識が生まれていた。また、「学期の初めに決めた目標すべてに花丸がつくとお楽しみ会をする」と児童が決めたことで、達成に向けたさらなるモチベーションとなった。

芝生っ子 きらきら プロジェクト S	
こころをみがこう	わざをみがこう
～Smile 芝生っ子～ ・「はいっ」ときはきはへんじをしよう。	～Special 芝生っ子～ ・あいての方を見てさいごまで話をきこう。
低学年 ・ふわふわことばをつかおう。	・だまって時間いっぱいそうじをしよう。
・自分からあいさつをしよう。	・整理整頓をしよう。
中学年 ・あいづちをうちながら話を聞こう。	・ろう下を歩こう。
・ていねいな言葉づかいをしよう。	・チャイムで行動しよう。
高学年 ・ものを大切にたもとう。	



4 結果と考察

本研究で、活発な児童の特性を生かしたことで、互いに認め高め合う時間が充実したように感じる。また、児童はやりたいことに夢中になり活動を継続的に行えたことで、成功体験が増え、自分の役割を見つけようとする行動に繋がっていた。様々な活動の中で、一人一人にどこかで輝く瞬間が生まれ、お互いのよさを感じ、認め合っていた。授業中や休み時間、帰りの会、といった場面でもほめる機会が増え、教員にとっても児童にとってもプラスとなった。

発言や学校アンケートから、まだ友達から認められている部分に自信をもちきれない児童や友達と関わっているけれど孤独感を感じている児童がいるという課題はある。これからも教師と児童同士、関わりのある人から、一人一人の行動を認める機会や場面が増やせるように、研究を続けていきたい。

5 参考文献

「第 70 回四国地区人権教育研究大会資料」

「最強のクラスをつくる！対話指導プロの技」 菊池省三、田中聖吾 明治図書（144 ページ）

「学級力がアップする！教室掲示&レイアウト アイデア事典」

静岡教育サークル「シリウス」 明治図書（144 ページ）

学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS） ～「き・め・つ」を学校全体に浸透させよう～

白地小学校 教諭 竹原 朋子

1 はじめに

本校は児童数30名、3年生の児童は在籍せず、5・6年生は複式学級の小規模校である。子どもたちは素直で明るく、休み時間や体育の学習、清掃活動など、学年関係なく全校児童で関わり合いながら仲良く過ごしている。しかし、少人数であるがゆえに人間関係の変化に乏しく、言わなくても理解してもらえらるだろうという考えや固定観念により、自分で考えたことを相手に発信するなどの表現力を伸ばしきれていない面もある。また、決められた仕事や役割に対して真面目に取り組む、何事にも一生懸命であるが、自分から主体的に行動する児童は少ないと感じる。

そこで本年度より学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）に取り組み、児童一人一人が自己有用感に基づいた自尊感情を持ち、自らの学びを、自信をもって表現できるようにしたいと考え、実践を行った。

2 実践

（1）新・旧職員での企画会議

児童・全教職員が同じ目標に向かって取り組んでいけるように、年度替わりの3月末日に、新・旧職員で児童のよいところ・もっとのびしたいところを出し合い共通理解をした。そして、出たものから「3つの大切」を考えた。

Jamboardを活用することで、全教職員が一つのシートで情報を共有した。付箋機能を使って項目ごとに分けることができたので、とても有効な手段だった。また、行動目標設定表を作成するときには、Jamboardに貼り付けた付箋の中から具体的ながんばりポイントを考えた。

新・旧職員が揃って情報共有することで、旧職員が1年間見てきた児童の良い点や来年度に向けた課題を設定することができた。また、新組織のメンバーが同じ課題意識を持ってスタートできたことにより、子どもを高めていく継続的な指導が可能となった。



Jamboard を使った企画会議



3つの大切

白地小学校 がんばりポイント表
全集中で はくっちいず 3つの呼吸!!

	きまり	めざす	つながる
授業中	□ 次の授業の準備をしよう □ 最後まではっきり話そう	□ 一日一回以上発表しよう	□ 話をしている人の方を向いて最後まで聞こう □ 発表している人に反応しよう
休み時間	□ 右がわを静かに歩こう □ 授業がはじまるときには席に座っておこう □ 使ったものど場所に戻そう	□ いろんな遊びに挑戦しよう	□ いろんな友達となかよく遊ぼう
登下校	□ 決まった道をまっすぐ歩いて学校に来よう □ 活動に間に合うように登校しよう	□ 体力アップのために歩こう	□ 地域の人にも自分からあいさつをしよう
いつでも	□ メディアはお家の人と決めた時間だけ使おう □ 「くらしのきまり」を守ろう	□ 何にでも挑戦しよう	□ 自分から進んであいさつをしよう（ついでにひと言） □ 友達に「ありがとう」「ごめんね」が言えるようにしよう □ 友達のがんばっているところ、前よりもできるようになったところを見つけよう

行動目標設定表（がんばりポイント表）

（２）生徒指導に PBS を

昨年度は、月初めに職員から児童へ生活目標を提示し、それを受けて児童一人一人が自分なりの目標を考えて取り組んでいた。今年度は、その月目標に PBS を取り入れ、児童の主体性を育てるためにも「児童から児童への提示」というスタイルに変更して取り組んだ。4 月は職員が発表の流れを示したが、それ以降は高学年で構成された「きめつリーダー」が次の手順で行った。



目標決定

①月末に 2～3 度集まる（きめつ柱会議）

②月目標の振り返りと決定

- ・ 目標を決めた理由
- ・ 目標を達成することで得られる良いこと
- ・ 目標を達成するための具体的な行動モデルを考える



振り返り

③月初めの朝会で発表

- ・ ロールプレイ等の演技を用いながら全校児童へ提示

職員主体から児童主体へと変化させたことで、学校全体の目標へと向かう気持ちに一体感が生まれた。また、きめつ柱会議に参加する児童は、休み時間や授業中の自分達の姿を振り返りながら目標を考えてきていた。また、全校児童に伝えるにはどうすればいいかを主体的に考え表現するなど、児童にも変化が見られた。



全校児童へ発表

（３）学校全体へ「き・め・つ」を浸透させるための取組

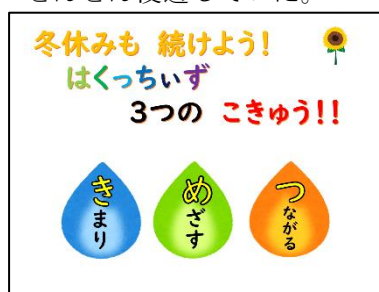
「学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）」で大切なことは、全教職員が同じ方向を向いて取り組んでいくことである。3つの大切「きまり」「めざす」「つながる」を様々な場面で共有し、学校全体が同じ方向に向かっていけるように次のことについて取り組んだ。

① 校長・担任からの話

いつでも児童の目に入るように、児童玄関や各教室に行動目標設定表を掲示した。朝会の学校長の話の中には必ず「き・め・つ」の要素が組み込まれており、その際にも行動目標設定表を活用していた。また、終業式の生徒指導や保健指導の話の中にも「き・め・つ」を取り入れることで、目標が一貫されていた。それを受けて、各学級でも「き・め・つ」に繋げて話をするすることで、児童へどんどん浸透していた。



朝会での学校長のお話



生徒指導のお話



養護教諭のお話

② 職員会での計画案

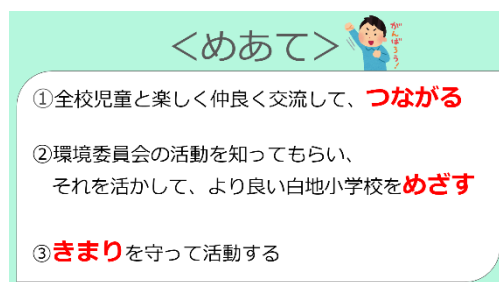
様々な行事や活動を計画するときに、各担当がねらいや目標とするところを「き・め・つ」に沿うように作成した。そうすることで、児童に一貫した指導を行うことができた。

ウェルカム トウ 白地 パーティー	
～ようこそ! 白地へ～(案)	
ねらい	
○きまりを守りながら、楽しく過ごそう。(◎全学年)	○ ○ ○
○1年生のことを知り、みんなで仲よくなろう。	○
(◎全学年)	○

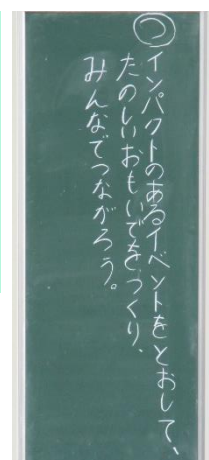
1年生を迎える会の企画

③ 委員会主催の集会や学校行事

運動会のスローガンや児童代表誓いのことばにも「き・め・つ」は盛り込まれていた。スローガンを全校児童から募り、集まった案を元に、高学年がアイデアを出し合って考えた結果、「きめつパワー!! 友笑への道切り拓け」に決定した。また、委員会主催での集会活動を計画するときにも、全校児童へ向けためあてを考えた。このように、児童たちにも「き・め・つ」が浸透し、主体的にめあてを考え、表現することができるようになってきている。



環境委員会



図書・放送委員会

3 おわりに

【成果】・児童から児童に発信する機会が増えたことで、児童が主体的に取り組むようになった。

・学校全体がチームとして取り組むことで、一体感が生まれた。

【課題】・小規模校におけるデータ活用について

・マンネリ化を打破するシフトチェンジやバージョンアップの機会や方法について

4 参考文献, URL

・徳島県立総合教育センター「特別支援まなびの広場」

<https://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp/>

・若林上総他,「学校全体で取り組むポジティブな行動支援スタートガイド」ジヤース教育新社

研究主題

豊かな人権感覚を身に付け、自ら考え、行動できる児童の育成を目指して ～人権教育を柱として取り組んだ実践～

山城小学校 教諭 川人 美保

1 はじめに

本校は、山々に囲まれた自然豊かな地域にある。その環境の中で児童は素直で明るく、日々様々なことを経験しながら、心を育み、成長している。現在51名の児童が通っており、三好市では児童数が多い方にあたる。しかし実際は、平野・西宇・政友・大野・上名・河内・大和など近隣の小学校が次々に休校になり、その地域に住む児童たちが集まって本校に通っているという状態である。少人数でありながら、住んでいる地域が幅広いため、幼い頃から児童同士の交流が少なく、対人関係が未熟な傾向にある。児童が大人になって社会に出た時、自ら進んで未来を切り拓いていけるように、豊かな人権感覚を培ってほしいと考える。

2 児童の実態と課題

第5学年の児童は、一人ひとりが個性豊かで、高学年の仲間入りをした4月からこれまで、下学年のお手本となることを目標に、それぞれが経験を積み重ねて学校生活を送ってきた。昼休みに全校で楽しめるドッジボールを企画したり、集会・ボランティア委員会主催の「あいさつチャンピオン」を積極的に目指して元気な声で挨拶をしたりと行動に移す力をもっている。

しかし、一方で、友達に自分の意見を伝えようとする時、厳しい伝え方になってしまったり、友達の意見を素直に聞けず反発してしまったりする児童がいる。「○○くんはこうだから」といった偏見や間違った考えで相手を決めつけたり、教師のいないところで友達を差別する発言をしたりとまだまだ学級全体で課題が多い。このような実態から、多様性を広い心で認められるように豊かな人権感覚を児童に身につけさせたい。そして、日常生活で児童が見過ごしがちな人権問題に焦点を当てた学習活動を通して、正しい判断の大切さに気付き、お互いを尊重し合える態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

3 研究の実践

令和6年度、本校は西部ブロック人権教育主事会の会場校となる。本年度、全学年で研究授業を行い、全教職員で人権教育の研修を積み重ねている。

(1) 学級での取り組み

第5学年は、『ちがい』を『個性』としてとらえ、互いに尊重し合える児童を育てる」を本年度の重点目標とした。普遍的な学習のテーマは「個人の尊重」とし、児童の課題と向き合いながら7月に校内で研究授業を行った。その際に提示した指導計画は次の通りである。

- | |
|------------------------------------|
| (1) 道徳科 「転校生がやってきた」 |
| (2) 道徳科 「ちがいのちがい①」(“あわ”人権学習ハンドブック) |
| (3) 道徳科 「ちがいのちがい②」(“あわ”人権学習ハンドブック) |
| (4) 道徳科 「ちがうことばんざい」(ひかり) |

① 人権感覚を育む

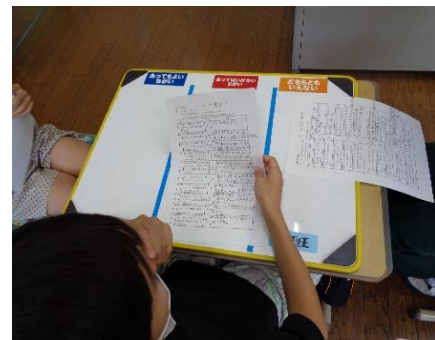
まず、研究授業の事前学習として「転校生がやってきた」について取り組んだ。物語の主人公の学級と本学級を照らし合わせ、何気なく発した言葉やその時の行動が差別や偏見となってしまうこと、そしてそれがいじめにつながってしまうことを意識させた。その上で、突然、友達から理由もなく無視をされ苦しんでいる主人公の思いに寄り添うことで、人を選んで差別をする行為は絶対に行ってはいけない、許されないことであることを再確認した。

さらに、この学習では、明らかにおかしいと感じる出来事があっても見過ごしていた「傍観者」の立場にも目を向けて考えることに取り組んだ。自分には関係ないと問題から目を背けるのではなく、「これって正しいことなのか」と察することができる人権感覚の大切さ、周囲の雰囲気や人間関係に流されず、自分の意思を強くもって正しい行動に移していくことの大切さを学んだ。

この学習を通して、少しずつではあるが児童の様子に変化を感じるようになった。共に歩んでいく友達だからこそ、見過ごすのではなく、自分たちで声をあげて行動していく力をこれからも身に付けていってほしいと感じる。

② 正しい「ちがい」を認め合う

次に、『“あわ”人権学習ハンドブック』に掲載されている「ちがいのちがい」の学習を行った。日常生活や社会で見られる事例を10個用意し、各々が「あってもよいちがい」「あってはいけないちがい」「どちらともいえないちがい」のどのグループに分けられるのかについて児童に考えさせた。この教材は、児童の身近にある事柄や文化や民族、個性のちがいや多様性を知り、お互いの「ちがい」を受け止め合うことをねらいとしている。一方で、「ちがい」をそのまま肯定すればよいということではなく、日常には差別につながる「ちがい」も存在している。そのことに児童自身が気づき、何が尊重されるべき「ちがい」で、何が課題として問われるべき「ちがい」なのかをしっかりと考えさせたいと考えた。さらに、どうしてそう考えたかという理由を伝え合うことで、児童同士の話し合いを深めさせたい。知らず知らずのうちに刷り込まれている思い込みに気づき、マイナスイメージが偏見や差別につながるということを理解し、互いを正しく尊重し合って生活していく態度を育てたいと考えた。本教材は、『“あわ”人権学習ハンドブック』に1時間教材として取り上げられているが、班ごとの話し合い時間を十分確保するには足りないと感じた。よって、「ちがいのちがい①・②」と分割して学習を行った。①でワークシートを使ってそれぞれの日常にある「ちがい」の事例について



個々で意見を考え、②でそのワークシートの自分の意見をもとに、「あってもよいちがい」「あってはいけないちがい」「どちらともいえないちがい」の3つに班でグループ分けをし、そう考えた理由を友達と共有し合うことで、様々な考え方を知り、自分事として問題と向き合う経験を積み重ねた。しかし、児童の中には、班で意見を出し合う時に、自分が発した言葉が差別的発言だと気付かずにいる児童もいた。反省点は、教師自ら児童の発言に切り込んでいき、見え隠れしていた児童の課題と向き合い、他人事と考えがちであった事例を自分の生活に結びつけ、立ち返らせるべきであったことである。

(2) 職員研修

本年度、新たな試みとして「ホワイトボード・ミーティング®」という会議の方法を取り入れた研修を定期的に行っている。進行役をファシリテーター、参加者をサイドワーカーと呼び、ファシリテーターが参加者の意見をホワイトボードに書くことにより、何を話し合っているのかが明確になり、効率的・効果的に会議が進むという利点がある。月末に行う定例進捗会議では教員同士で共通理解を図り、各学級での実践や課題をフィードバックし合っている。質問やアドバイスの時間を設けることで、教職員同士のコミュニケーションの機会が確保でき、トラブルの未然防止にも繋げている。また、組織運営の基礎体力をつけるという目的もある。授業研究会では付箋を使ったKJ法での会議形式も活用しながら、その時々での研修に合わせて人権教育の向上に取り組んでいる。



4 おわりに

今回の実践を通して、児童は自分の考えを理由とともに伝え合うことで、主体的に話し合いに取り組んでいた。意見の決定に悩んだ時は、言葉を付け加えたり言い換えたりして思考を整理している児童の姿も見られた。ちがいのグループ分けでは、枠の線にこだわらず「どちらともいえないちがい」と「あってはいけないちがい」の中間という新しいわけ方を児童が自ら導き出して作るという姿も見られた。しかし、実践でも述べた通り児童の中にある偏見や差別の心をすべて解消できたわけではない。児童がお互いを認め合い、温かい心を育んでいけるよう今後も全力でサポートしていきたいと決意した。さらに、全教職員で一丸となって、未来の社会を担っていく児童たちが豊かな人権感覚を身に付けられるよう授業実践をこれからも継続的に取り組んでいきたい。



【参考文献，URL】

○株式会社ひとまち「ホワイトボード・ミーティング®とは」<https://wbmf.info/whatwbm/>

研究主題 ふるさとに誇りをもち、主体的に生きる力の育成
～ふるさと学習や小規模の強みを生かした取り組みを通して～

西祖谷中学校 教諭 内田 ゆかり

1 はじめに

本校は美しい自然と、地域で守られ受け継がれてきた伝統や文化が豊富にあることから、ふるさと学習を核に据えた教育活動を系統的に計画し、全校生徒、全職員で取り組んでいる。全校生徒は3年生の4名で、教職員8名とともに令和5年度をスタートした。

2 研究の目的

ふるさとのすばらしさを知り、卒業後もふるさとに誇りををもって、自らの人生を切り拓いていく力をつけてほしいという本校教職員の願いがある。そこで、ふるさと学習を通して地域を知り、地域や地域の人に関わることで、ふるさとを愛する心や自分を大切に思う心を育むことを目指し取り組んできた。生徒たちは素直であるが、自分の意見や考えを伝えることが苦手な生徒が多い。また、自主性に欠ける面がある。このような実態から、多様な考え方や価値観に触れる機会を増やすことで豊かな感性を育みたい。また、体験活動をさらに充実させ、様々な立場の人とふれあう機会を設定することで、人と積極的に関わり主体的に行動する力をつけたいと考えた。

3 研究の実践

(1) ふるさと学習

○観光のシンボル「かずら橋」について

地域の方の協力のもと、かずら橋の材料となる挿し木で育てられたシラクチカズラの苗木を、小学生と合同で植栽している。また、3年に一度行われるかずら橋の架け替えの際には、作業を体験させてもらっている。今年度が架け替えの年に当たることから、実際に体験した先輩から「すごい技術に感動した」といった感想を聞いている生徒たちは、2月の体験学習を大変楽しみにしている。

全国各地で開催されている木橋サミットが、今年度三好市を会場として開催され、本校生徒たちも「ふるさとの自然・伝統・文化」というテーマのもと、これまでのふるさと学習で学んだことを発表した。1学期に香川大学農学部を訪問させていただき、シラクチカズラの研究の第一人者である片岡教授から、シラクチカズラの性質や生育について学んだことを発表した。発表の一部をクイズ形式にすることで、会場の人に考えてもらったりもした。どの生徒も落ち着いて発表し、参加者からの質問にも、今までの経験を通して学んだことを踏まえて、自分の思いや考えを伝えることができた。

「緊張したけど、全国の多くの人に西祖谷のことを知ってもらえてよかった」「この体験を通してプレゼンテーションの力もついたように思う」と感想に述べている。



○神代踊り参加

西祖谷の善徳で、約千年前に雨乞いを祈願して始まったとされる風流踊り「神代踊り」が、2022年の11月にユネスコの無形文化遺産に登録された。校区の子どもたちは、踊り手として8月の善徳天満宮での奉納踊りに参加している。今年度は、神代踊り保存会の協力のもと、小中合同練習会をもち、8月11日の本番に向け練習に励んだ。奉納日当日は、各地より多くの観客や取材関係者が駆けつけ、大勢の人に囲まれる中で、衣装を身につけた生徒たちは緊張しながらも優雅に踊りを披露した。



(2) 一人一人が主役の「西中祭」

今年のテーマは「一致団結」。実行委員は4人であるため、例年より早く準備に取りかかった。毎年のステージの中心である国見太鼓・ダンス・合唱に、新しく「箏演奏」を加えた。できるだけ多くの人に参加してもらおうと、校区の小学校に当日の内容についてオンラインで紹介したり、体験コーナーに幼い子どもでも楽しめるゲームを増やしたりするなど、生徒独自のアイデアを取り入れた。メンバーは4人。一人一人の役割は大きく、それぞれのモチベーションや発揮するパフォーマンスが全体の完成度に影響する。どの演技も練習を重ねていくうちに一人一人におのずとその自覚が芽生えてきた。

文化祭当日は、保護者や家族に加えて、校区の小学生、卒業生、昨年お世話になった先生方など、多くの人々が来校した。大勢の人たちが見守るなか、一段と力が入った演技をして期待に応えようとする生徒たちの気迫が伝わってきた。全員で西中祭をやりきった後の生徒たちの姿は、今までに見たことのない自信に満ちあふれていた。



(3) 多様な考えや思いに触れること

○わくわくタイム

月曜日の6校時終了後に集会をもち、学校長を含めた全教員が、生徒たちに講話を行っている。誰が話すのかは、生徒が当日に決定する。子どもの頃抱いた夢、学生時代の話、自分が大切に思っていることなど、テーマは様々だが、いつ担当になっても対応できるよう話を用意しておく。話を聞いたあとは、心に残ったことや感想を書き、話した教員に渡す。全教員に順番がまわれば、次は生徒たちが話をする番である。教員も生徒もまさに「わくわく」する時間である。

○ようこそ先輩

キャリアステージがそれぞれ異なる本校の卒業生に、今の自分やこれまでに歩んできた道を語ってもらうことで、進路を決める参考とし、更には同じ郷里の先輩たちとつながりをもつ機会がもてればと思い、夏休みに実施した。招待したのは、高校生、専門学校生、社会人の3人の卒業生である。夢や目標・生徒たちへのアドバイスを、それぞれの立場から話し、生徒たちからの質問にもわかりやすく答えてくれた。年齢が近く同じ郷里で育った先輩の話を、興味深そうに聞いていた。

○人権問題意見発表会・人権講演会

毎年1学期に人権問題について作文を書き、全員が全校で意見発表している。今年度は、「誰もが楽しく自由に生きる権利」、「できることから」、「偏見や差別がない世界へ」、「平等な社会をめざして」というテーマでそれぞれが発表した。その後、徳山富子先生による「ありのままの自分で生きる」という題名で性の多様性について講話をしていただいた。性には様々な形があることを学び、すべての人が生きやすい社会にするために自分ができることは何かを考える機会になった。

4 結果と考察

7月、「神代踊りのこと英語のスピーチで言っているいいですか」と、英語に興味をもっている生徒が申し出てきた。神代踊りについて知らないことも多く、踊りの練習の合間に保存会の人に聞き取りをするなど意欲的に情報を集めて原稿を作成した。そのなかで、すばらしい伝統芸能を継承していく上で、後継者不足が大きな課題となっていることを知り、それを解決するためにはどうしたらよいのか自分なりに考え、三好郡市のスピーチコンテストで発表した。また、祖父や父親、小学校の妹と三世代で神代踊りの練習に励む生徒は、「神代踊り保存会の一員である祖父や父親が、一生懸命に踊りを守ろうと行動する姿を見て、自分も何か一緒にできることをしたいと思うようになった。」と木橋サミットの参加者からの質問に対して自分の思いを語った。このように地域の行事に参加体験していくなかで、伝統を守っていこうという意識が芽生えている。さらには、原稿がなければ人前で話せなかった生徒が、ある行事で即興で大勢の前で話す機会を与えられた時に、前を向き自分の過去のエピソードまで交えたスピーチができた。様々な学校行事や教科学習の中で、発表する機会を多く持ってきたことで、どの生徒も自分の意見を持ち、それを自分の言葉で語るできるようになってきた。

5 おわりに

昨年度から2年間本校に勤務し、少人数を生かした学習活動や地域で受け継がれてきた文化や伝統を生かしたふるさと学習に、子どもたちとともに取り組んできた。四季折々の自然の美しさや豊かな文化を感じることでできる西祖谷には、多くの人たちが何度も訪れる。子どもたちが、ふるさと西祖谷で育ったことを誇りに思い、自分らしく、たくましく自らの人生を切り拓いていってほしいと願う。西祖谷中学校は、来年度の在籍数が0となり、やむをえず休校となる。本校で系統的・発展的に取り組んできたふるさと学習は、キャリア教育そのものであり、その意義と成果を当原稿を作成しながら振り返ることができた。その学びの機会を与えてくれたことに感謝したい。そして数々の出会いがあり、ともに過ごす中で自分自身を成長させてくれたすべての人々に感謝したい。



令和5年度 教育研修・研究事業報告

1 研究主題

「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動」

2 事業

(1) 調査研究

- ア 教育課程の研究
- イ 複式の特性を生かした学習指導方法の研究
- ウ 情報教育についての研究
- エ 地域の教育力を生かした教育活動の研究
- オ 生徒指導にかかわる諸問題の調査研究
- カ 各種研究会への参加と研究物の収集
- キ 購入図書・DVD等の紹介

(2) 各種研究会及び研修会の開催・共催

- ア 教育研究推進協議会・教育研究所協力委員会
5月31日（水）
- イ 情報教育研修会（小教研情報教育部会と共催）
8月16日（水） 夏期研修会（とくぎんトモニプラザ）
10月20日（金） コンピュータ作品審査等（三好教育センター）
- ウ 複式教育研修会（小教研へき地・複式部会と共催）
8月3日（木） 指導案検討会（櫛生小学校）
- エ 人権教育研究会（三好郡市学校人権教育研究大会後援）
11月9日（木） 就学前分科会（西井川保育所）
11月6日（月） 小学校分科会（西井川小学校）
11月2日（木） 中学校分科会（三加茂中学校）
- オ 新任管理職研修 参加者13名
5月9日（火） 管理職としての心得
サービス・勤務態様等事務関係について
講師 竹内 明裕（三好市教育委員会教育長）
宮内 美和（池田小学校事務室長）
柏尾 美恵（加茂小学校事務室長）
- カ 学校運営研修会（教頭・中堅教員研修会） 参加者20名
開催日と講師
6月15日（木） 講義1 高岡 和恵（三好教育研究所長）
6月27日（火） 講義2 濱田 雅子（鳴門教育大学就職支援アドバイザー）
7月22日（土） 講義3 伊丹 賢治（四国大学准教授）
※オ～カ「三好教育振興協議会」との連携による事業

(3) 研究委嘱、研究協力校（園）への指導・助成

- ア 研究発表校
馬路小学校・井川中学校

イ 研究協力校（令和6年度発表校）

櫟生小学校・三好教育研究所

ウ 委嘱研究員

幼稚園	3区	池田幼稚園	森本 智恵	教諭
小学校	1区	加茂小学校	川人 律子	教諭
	2区	芝生小学校	西原 依里	教諭
	3区	白地小学校	竹原 朋子	教諭
	4区	山城小学校	川人 美保	教諭
中学校	1区	西祖谷中学校	内田 ゆかり	教諭

(4) 各研究会，団体等との協力

ア 三好教育会

イ 三好郡・市小学校教育研究会，三好郡・市中学校教育研究会

ウ 三好郡・市学校人権教育研究協議会

エ 三好郡・市各幼稚園・小学校・中学校

オ 中・四国教育研究所連盟

カ その他教育関係諸機関

3 研究成果の発表及びその普及

(1) 三好教育研究発表会

日 時 令和5年8月17日（木） 13：25～16：40

会 場 三好市池田総合体育館

○研究発表

・馬路小学校 研究主題

小規模校の特性を生かした教育活動の推進

～他校とのオンライン学習の実践を通して～

発表者 中山 祐子 教諭

・井川中学校 研究主題

変化する社会の中で，学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方

～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～

発表者 田口 智也 教諭

○講演

演題 「ほめ言葉のシャワー」が成立する教室をつくろう

講師 菊池 省三 氏（教育実践研究家）

(2) 研究紀要（第64集）の発行と研究所報（第104号）の発行

各学校・園，各研究機関に送付

(3) ホームページ等による広報活動

(4) 研究員による研究成果のまとめと報告（県教育委員会へ提出）

(5) 三好教育振興協議会の事務

各種調査・整理，会議の運営など

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

幼稚園・小学校

年度	幼稚園	小学校				
	幼稚園	小学校1区	小学校2区	小学校3区	小学校4区	小学校5区
H1	国見マチ子(絵堂幼) 斎藤光子(三野幼)	藤本政義(王地小) 坂野町子(三庄小)	天竹勉(昼間小) 前川順子(辻小)	吉岡弘恵(池田小) 久保徹(箸蔵小)	森勝正(河内小) 小笠健二(大野小)	森本義博(櫟生小) 和田初枝(落合小)
2	国見マチ子(絵堂幼) 斎藤光子(三野幼)	藤本政義(王地小) 坂野町子(三庄小)	天竹勉(昼間小) 前川順子(辻小)	吉岡弘恵(池田小) 久保徹(箸蔵小)	森勝正(河内小) 小笠健二(大野小)	森本義博(櫟生小) 和田初枝(落合小)
3	山口悦子(増川幼) 横田嘉代子(昼間幼)	小笠松美(王地小) 大瀧和彦(加茂小)	藤野圭一(足代小) 為実敬子(西井川小)	武内隆史(出合小) 真鍋宏実(馬場小)	竹野啓治(大和小) 篠原聡(下名小)	細川文男(櫟生小) 松村直也(和田小)
4	佐々木隆子(東山幼) 井上淳子(足代幼)	大瀧和彦(加茂小) 小笠松美(王地小)	為実敬子(西井川小) 藤野圭一(足代小)	武内隆史(出合小) 真鍋宏実(馬場小)	竹野啓治(大和小) 篠原聡(下名小)	松村直也(和田小) 細川文男(櫟生小)
5	岡久尚子(白地幼) 矢野聡子(出合幼)	辻宏明(芝生小) 田岡茂樹(加茂小)	中川糸子(足代小) 齋藤孝(西井川小)	坂本武彦(白地小) 伊丹賢治(三縄小)	田中敬子(上名小) 志磨昭子(大和小)	谷恒二(吾橋小) 大塚一志(栃之瀬小)
6	岡久尚子(白地幼) 矢野聡子(出合幼)	辻宏明(芝生小) 田岡茂樹(加茂小)	中川糸子(足代小) 齋藤孝(西井川小)	坂本武彦(白地小) 伊丹賢治(三縄小)	志磨昭子(大和小) 田中敬子(上名小)	大瀧和彦(吾橋小) 大塚一志(栃之瀬小)
7	大久保珠美(池田幼) 國金砂恵子(野呂内幼)	松田徳子(王地小) 中川斉史(三庄小)	真鍋宏実(昼間小) 土井清子(井内小)	中川法子(池田小) 川人成子(三縄小)	井後辰哉(政友小) 峯川郁代(山城小)	濱口久弥(吾橋小) 森本誠司(落合小)
8	國金砂恵子(川崎幼) 大久保珠美(池田幼)	松田徳子(王地小) 中川斉史(三庄小)	真鍋宏実(昼間小) 土井清子(井内小)	中川法子(池田小) 川人成子(三縄小)	井後辰哉(政友小) 峯川郁代(山城小)	濱口久弥(吾橋小) 森本誠司(落合小)
9	岡尾千恵(下名幼)	原敏二(三庄小)	中川貴史(昼間小)	篠原晃代(馬路小)	小笠原誠(平野小)	徳善之浩(名頃小)
10	木村恵美子(西岡幼)	野町孝英(芝生小)	石井文子(辻小)	島田晴代(野呂内小)	篠原義正(河内小)	岩崎順子(善徳小)
11	三木香代(西庄幼)	森北直樹(加茂小)	中村瑞穂(足代小)	山下史記(佐野小)	河野通之(大野小)	向井ひろみ(菅生小)
12	渡辺千枝(三野幼)	平田公彦(太刀野山小)	小角昌美(西井川小)	三好美智代(西山小)	谷口政代(下名小)	品川知美(櫟生小)
13	岡本久美(西井川幼)	三橋洋子(西庄小)	今川仁史(東山小)	生藤元(箸蔵小)	三橋泰(落合小)	
14	大西恒子(井内幼)	喜多とよみ(王地小)	細谷加代子(井内小)	近藤直美(池田小)	瀧下光子(西宇小)	
15	山中あけみ(箸蔵幼)	樋口隆則(絵堂小)	加藤公夫(昼間小)	近藤明美(三縄小)	松浦理恵(善徳小)	
16	新居利枝(馬路幼)	松代容子(芝生小)	福田ミカ(辻小)	松下寛興(白地小)	井上清隆(栃之瀬小)	
17	古井智恵子(善徳幼)	武田淳子(三庄小)	佐藤仁美(足代小)	向井ひろみ(馬路小)	山中祐二(大野小)	
18	谷本紀子(大野幼)	平尾佐知子(加茂小)	北川ひとみ(王地小)	渡邊真弓(川崎小)	岡本悟(櫟生小)	
19	佐藤重美(東山幼)	平野貴志(東山小)	豊田昌弘(西井川小)	木内晃(佐野小)	猪子研司(和田小)	
20	鳥首こずえ(加茂幼)	邊見明美(絵堂小)	井原理恵(芝生小)	宮本真吾(西山小)	河野恵子(山城小)	
21	大西照子(西井川幼)	和田光司(西庄小)	小角昌美(井内小)	中妻稔子(箸蔵小)	森祐大(吾橋小)	
22	釈子育香(井内幼)	森幸子(昼間小)	松本珠実(王地小)	永山睦子(池田小)	清重正俊(栃之瀬小)	
23	城尾春菜(池田幼)	小角聡志(加茂小)	平尾昌彦(辻小)	安藤久子(三縄小)	平岡千佳(政友小)	
24	元木真砂代(池田幼)	近藤博美(三庄小)	園尾淑子(芝生小)	神谷美樹(白地小)	岩崎真人(櫟生小)	
25	石井やよい(昼間幼)	大久保智江(足代小)	中瀧由紀(井内小)	石丸美穂(馬路小)	福田浩司(東祖谷小)	
26	田岡あけみ(三庄幼)	大西三千代(昼間小)	木村栄治(王地小)	瀧本恭代(川崎小)	喜多芳恵(下名小)	
27	真鍋友子(辻幼)	大西勇貴(加茂小)	藤川美香(西井川小)	新藤茂美(箸蔵小)	長岡鷹太(吾橋小)	
28	加藤由美(辻幼)	木村麻紀子(三庄小)	玉木恵子(芝生小)	上浦大輔(池田小)	瀧下光子(政友小)	
29	岡尾千恵(山城幼)	岡田直人(足代小)	岡慎太郎(辻小)	松本美穂(三縄小)	竹内友梨(山城小)	
30	山本眞由美(白地幼)	曾我部悦嗣(昼間小)	大西利江子(王地小)	中川法子(白地小)	岩崎順子(櫟生小)	
R1	藤川孝子(足代幼)	鮎川美加(加茂小)	伊丹智子(西井川小)	前田泉季(馬路小)	喜多芳恵(山城小)	
2	宮成典子(加茂幼)	筆本晴香(三庄小)	徳永直(芝生小)	高田寛子(箸蔵小)	中岡加代子(東祖谷小)	
3	佐藤知美(辻幼)	横山万莉菜(足代小)	笹田季生(王地小)	中妻美穂(池田小)	齋藤早織(下名小)	
4	赤堀奏子(池田幼)	逸見香織(昼間小)	住友優香(辻小)	中瀧由紀(三縄小)	養護部会	
5	森本智恵(池田幼)	川人律子(加茂小)	西原依里(芝生小)	竹原朋子(白地小)	川人美保(山城小)	

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

中学校

年度	中学校				
	中学校1区	中学校2区	中学校3区	中学校4区	中学校5区
H1	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
2	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
3	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	島本富美子(東祖谷中)
4	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	玉木富美子(東祖谷中)
5	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
6	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
7	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
8	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
9	三好康彦(三加茂中)	国友博司(井川中)	伊丹尚子(池田一中)	大西恭司(大野中)	島本清(西祖谷中)
10	青山貴幸(三野中)	上田美恵(三好中)	坂本浩江(池田中)	田村裕(山城中)	大谷一幸(東祖谷中)
11	平尾治美(三加茂中)	藤本恒幸(井川中)	尾崎真紀(池田一中)	新見哲也(大野中)	大倉俊之(西祖谷中)
12	宮成万寿美(三野中)	川人勝久(三好中)	内田公生(池田中)	白井正道(山城中)	宮成誠樹(東祖谷中)
13	玉木富美子(三加茂中)	川人祐子(井川中)	西岡ひとみ(池田一中)	板東祥子(西祖谷中)	
14	辺見俊二(三野中)	入江宏明(三好中)	川人恵美(池田中)	根津道子(東祖谷中)	
15	坂部公章(三加茂中)	山内幸子(井川中)	高田和枝(池田一中)	大谷一幸(山城中)	
16	村上義昭(三野中)	野田圭祐(三好中)	峰友真弓(池田一中)	安田恵(西祖谷中)	
17	玉木利典(三加茂中)	立花久(井川中)	久保喜昭(池田中)	岡本博一(東祖谷中)	
18	木藤和恵(三好中)	宮浦理恵(三野中)	沖原真紀(西祖谷中)	丸岡美枝(山城中)	
19	藤本智恵(三加茂中)	大石さえ子(井川中)	中川浩幸(池田一中)	ナサーニョ・デネヒー(東祖谷中)	
20	垂水恵子(三好中)	窪田和弘(三野中)			
21			尾嶋麻子(池田中)	山口雄三(山城中)	
22	渡辺仁(三加茂中)	近藤幸(井川中)			
23			常村淳(西祖谷中)	山口義明(東祖谷中)	
24	片山徹(三好中)	小出真理子(三野中)			
25			細川誠治(池田中)	峰友真弓(山城中)	
26	佐藤篤史(三加茂中)	伊藤憲志(井川中)			
27			芳川未弥(西祖谷中)	岡田祐佳(東祖谷中)	
28	石崎雄一(三好中)	石橋洋平(三野中)			
29			平尾昌彦(池田中)	西昭弘(山城中)	
30	天竹雄紀(三加茂中)	三好佐知(井川中)			
R1			谷口真美(西祖谷中)	藤村美咲(東祖谷中)	
2	大田悦彰(三好中)	入交理子(三野中)			
3			徳善咲紀(池田中)	仁尾芳人(山城中)	
4	佐藤真也(三加茂中)	田口智也(井川中)			
5			内田ゆかり(西祖谷中)		